

小竹だより

練馬区立小竹小学校 校長 泉崎 春海



平成25年7月号

No. 455

「当たり前のこと」

校長 泉崎 春海

先日、私がある集まりに出かけた時のことです。

大人や子どもたちが集会室に集まっていました。私が着いた時には、集会室の入り口にたくさんの靴が並んでいました。でも、靴の向きは、ばらばらです。そこへ、1人の男の子が駆け込んできました。ずいぶん急いで走ってきたのですが、入り口まで来ると、ピタッと止まりました。そして、自分の向きをくるっとかえると、脱いだ靴をそろえて、部屋の中に入って行きました。続いて、もう1人男の子が走ってきます。「お兄ちゃん、待って!」と言っているところを見ると、先ほどの子の弟のようです。この子も、入口のところまで走ってくると、パッと止まりました。そして、靴を脱ぐと、それを持って、靴先を出口の方へ向けそろえています。私が、思わず、「えらいね。靴をきちんとそろえて。」と声をかけると、その子は「当たり前だよ。」と言って部屋の中に入っていきました。

「当たり前だよ。」という言葉が胸に響きました。脱いだ靴をきちんとそろえる。これは、自分にとっても、周りの人にとっても大事なことです。靴が、ばらばらだと通る人が通りにくいし、自分が靴を履くときにも不便です。だから、脱いだときにきちんとそろえておくということは「当たり前のこと」です。でも、この「当たり前のこと」が、子どもたちにしっかりと身に付いているのか、また、私たち大人が「当たり前のこと」を子どもたちに、きちんと教えているのか、私は考え込んでしまいました。

『「当たり前のこと」』ができない子が増えている」と、このところよく耳にします。でも、大人にとって「当たり前のこと」でも、誰かが教えないかぎり、子どもにとっては「初めてのこと」や「知らないこと」です。私が見た兄弟も、きっとおうちの方から「脱いだ靴はきちんとそろえる」ことの意味や大切さを繰り返し教えてもらってきたからこそ「当たり前」にできているのだと思います。

学校でも、廊下で会うと必ず元気に挨拶をする子、校庭で遊んだ後に使った道具をきちんと片付ける子、靴箱に自分の靴をきちんと揃えて入れる子など、「当たり前のこと」を当たり前に行っている子が大勢います。この子どもたちの行動の裏には、「当たり前のこと」を行う意味を、きちんと根気よく教える大人の努力があるのだと思います。

自分やまわりの人たちが気持ちよく過ごせるような「当たり前のこと」が、日常たくさん見られるよう、学校でも、家庭でも、大人が子どもに向き合い、教え育てていきたいと思っています。